



TITLE:

<Book Reviews>K.M. de Silva et al. eds.  
Ethnic Conflict in Buddhist Societies : Sri  
Lanka, Thailand and Burma. London: Pinter  
Publishers Ltd., 1988, 220p.

AUTHOR(S):

足立, 明

---

CITATION:

足立, 明. <Book Reviews>K.M. de Silva et al. eds. Ethnic Conflict in Buddhist Societies : Sri Lanka, Thailand and Burma.  
London: Pinter Publishers Ltd., 1988, 220p.. 東南アジア研究 1993, 31(3): 293-295

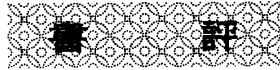
ISSUE DATE:

1993-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56502>

RIGHT:



K. M. de Silva; Pensri Duke; Ellen S. Goldberg; and Nathan Katz, eds. *Ethnic Conflict in Buddhist Societies: Sri Lanka, Thailand and Burma*. London: Pinter Publishers Ltd., 1988, 220 p.

本書は、仏教が支配的な三つの社会(スリランカ、タイ、ビルマ)での宗教、政治、エスニック集団間の軋轢・紛争を検討した論文集である。ここに収録された論文は、国際エスニック研究センター(スリランカ)とチュラロンコーン大学(タイ)の主催によるワークショップ、『仏教的政体における少数民族：スリランカ、タイ、ビルマの事例』(開催日時不明)で発表されたものである。本書は、以下に示すように、4部からなる13の論文で構成されている。

序章：仏教社会におけるエスニック紛争  
——スリランカ、タイ、ビルマ

(K. M. de Silva)

第1部：理論的な諸問題

1章：アイデンティティ像の論理と共同体的  
(communal) 暴力の倫理：仏教徒の見解

(Padmasiri de Silva)

2章：想像力と国家について

(Chaiwat Satha-Anand)

3章：仏教教義における少数民族

(P. D. Premasiri)

第2部：仏教、少数民族、公共政策

4章：スリランカにおけるナショナリズムと国家

(K. M. de Silva)

5章：ビルマ史における少数民族

(Ronald D. Renard)

6章：タイにおけるナショナリズムと国家

(Likhit Dhiravegin)

第3部：仏教僧院と少数民族

7章：スリランカにおける仏教復興とキリスト  
教徒の特権——1940年から1965年まで

(K. N. O. Dharmadasa)

8章：タンマチャリク僧 (*Dhammacarik Bhik-*

*khu*) 計画の北タイ山地民への影響

(Sanit Wongspraserit)

9章：スリランカ仏教僧にとってのエスニシテ  
ィーとナショナリズム

(Nathan Katz)

第4部：仏教的政体における少数民族の事例研究

10章：スリランカのプランテーションにおける  
インド・タミル人労働者——福祉と統合

(S. W. R. de A. Samarasinghe)

11章：現代ビルマにおける宗教的少数民族

(Trevor O. Ling)

12章：蓮と三日月——南タイにおける宗教的シ  
ンボリズムの衝突

(Surin Pitsuwan)

13章：スリランカの少数民族，ムスリム人

(K. M. de Silva)

本書の特徴は、仏教的政体の「理想」と「現実」を同時に扱っている点にある。ここで検討される中心的な問いは、非暴力と寛容が中心的な価値観である仏教社会で、どのようにエスニック集団間の対立や紛争が起きるのかというものである。もっとも、ここに収録された論文は、理論的研究や事例研究として個々の評価は分かれるところである。とくに、事例研究は、特定の時期の断片的な分析であって、歴史的な流れ全体を十分検討しているわけではない。また、Surin 論文は例外であるが、その他のいくつかの論文は少数民族からの視点に乏しく、Chaiwat の言う「少数民族問題とは、多数民族問題なのである」(p. 27) という見方が必ずしも反映されてはいない。しかし、それに関わらずこれらの論文は、三つの仏教社会の宗教、政治、少数民族の諸相を概観することを可能にし、仏教政体の「理想」と「現実」について議論するために十分な材料を提供している。以下で述べるように、本書は仏教的政体を脱神話化するという点で、評価しうるものとなっている。

本書の第1部では、まず仏教的政体の「理想」が仏教教理にもとづいて検討される。ここで示されるのは民衆の仏教実践と離れた、きわめてエリート的な分析である。Premasiri は仏教教理の分析をととして、仏教理念に則った政体(例えば、アシヨカ王の統治形態)において少数民族問題は起こらないとし、そのような政体の実現に努力するこ

とを説いている。P. de Silva は、仏教における無我 (*anatta*) の概念によってエスニック・アイデンティティの幻想性を明らかにし、仏教における他の宗教への寛容性を示すとともに、社会の改変における非暴力性を指摘している。しかし、このような仏教の理念は現実の社会的実践と大きく隔たっており、その溝を埋めるための実践的倫理はいまだ生まれていないとする。

それではこの仏教的政体の「理想」と「現実」の溝はどのように生じるのか。Chaiwat は政治社会学的な立場から国民国家の否定的な側面を理論的に検討し、いかにして少数民族問題が生起するかを論じている。彼は、まず、国家がどのようにして“想像の共同体”としての国家像（支配的な言語や領土、宗教、慣習といったものに基礎づけられた自己と共同体の感覚）を作り上げ、統治の正当性を確立するかを示す。また、このようにして成立した国家が、時として、二つのタイプの暴力を社会内部の少数民族に加えることを示している。一つは、政策を通して彼らを受け入れ難い従属的な状態や地位におとしめる構造的暴力、もう一つは、“想像の共同体”としての国家像を支えている支配的文化（とりわけ宗教や言語）に至高の位置を与える象徴的暴力である。そして、この二つの暴力が同時に作用するとき、少数民族がテロリズムと分離主義に向かうと論じている。

ここで Chaiwat は、冒頭に示した本書の問いを検討する基本的枠組みを提供している。彼は、現代社会における少数民族問題を、P. de Silva の指摘した仏教的実践倫理の問題でなく、“想像の共同体”としての国民国家の問題であることを示唆している。仏教的政体を“想像の共同体”としてとらえ、その脱神話化を主張しているのである。そして、このような仏教政体の脱神話化の必要性は、第2部以下における三つの仏教的政体の「現実」の分析によって、より鮮明になっていく。

K. M. de Silva によれば、植民統治下のスリランカでは、支配権力に近いキリスト教徒が政治的優位を保っていたが、独立前後を境にそれがシンハラ仏教徒に移行したという。そして、政府は1956年に仏教とシンハラ語を至高の位置に置く政策を打ち出し、シンハラ・ナショナリズムの高揚をもたらした。これは明らかに、非仏教徒である

タミル人にたいする象徴的暴力であり、公的機関への就職差別に結果する構造的暴力でもあった。これが現在も続くシンハラ＝タミル抗争のきっかけの一つになったことは言うまでもない。

Renard は、英国植民地化以前のビルマにおけるエスニック集団を論じ、そこには多くのエスニック集団が独立して存在しながら、相互に自由な交流を行っていた。しかし、一般によく知られていることだが、植民統治下でビルマ族とその他のエスニック集団が分割して統治された結果、独立後の深刻な少数民族問題をもたらしている。その一例として Ling は、政府が1961年に仏教を国教として制定し、非ビルマ族地域との関係を悪化させた過程を描いている。

これにたいして、タイは、少数民族問題の顕在化してきたスリランカやビルマと異なり、比較的安定した仏教的政体を作り上げてきた。仏教と、バンコクの王権、そして官僚制にもとづいた“想像の共同体”を確立させ、多くのエスニック集団を統合し同化してきたのである。Likhit は、このようなタイの成立する過程を、ラーマ4世の反中国人キャンペーンとビブーン元帥による国民国家形成のための様々なキャンペーンを通して記述し、さらに Sanit は、仏教僧による北部山地民の同化キャンペーンをごく最近の事例として紹介している。しかし、このようなタイにも少数民族問題が表面化していないわけではない。Surin が示すように、南タイのマレイ・ムスリム社会において政府の同化政策にたいする反感が高まっており、それらは色々な宗教的場面において象徴的に表現されている。

このように本書では、スリランカ、タイ、ビルマにおける“想像の共同体”としての仏教的政体と、それが生み出す少数民族問題を概観することができる。そして、それによって冒頭に示した問いにたいする一応の答が可能となる。それは、本書編集の中心人物である K. M. de Silva が序章で悲観的に述べているように、「社会の統一と調和をもたらす政策のもととなる中心的価値観として、仏教的政体というものは、もはや他のどのような政体とも同様に、役立たないものとなってしまった」(p. 10) というものである。

しかしながら、これですべての問題が解決した

わけではない。というのも、本書では少数民族問題との直接的な関係でのみ仏教的政体の性格が検討され、それ以外の多様な性格に関して包括的な検討がなされてこなかったからである。つまり、手を替え品を替え仏教的政体が語られ、再生産されるメカニズムの内在的な解明が必要なのである。スリランカに限って言えば、最近の S. J. Tambiah の研究 (*Buddhism Betrayed?: Religion, Politics,*

*and Violence in Sri Lanka*) はそのような解明を詳細に行なっている。今後は、このような分析をタイやビルマでも行ない、それらの比較検討を行なうことによって、“想像の共同体”としての仏教的政体を内在的に脱神話化することが期待される。その意味で、本書はその一里塚と言えるだろう。

(足立 明・北海道大学)